

1 源朝長供養塔

所在地 袋井市三川 積雲院

源朝長は平治の乱で平清盛に敗れた源義朝の次男である。朝長は父義朝とともに京都から東海道へと落ちのびる途中で、落武者狩りにあい受けた矢傷のため自害してはた。京都でさらされた朝長の首を家臣である大谷忠太が夜のやみにまぎれ、故郷の大谷村に持ち帰り供養塔を建てたと伝えられている。

現在、積雲院参道入口に所在する3基の五輪塔は、江戸時代の絵図を参考にすると、向かって左側が義朝、中央が義平（朝長の兄）、右側が朝長の供養塔と考えられる。この五輪塔は、緑色凝灰岩製（焼津市当目石）で、鎌倉



源朝長の供養塔

時代末期に制作されたと考えられ、覆堂のなかで大切にまつられている。

参考文献「袋井市史 通史編」1983年 袋井市

2 村松家墓塔群

所在地 袋井市春岡 林光寺裏

戦国時代、宇刈七ヶ村に住んでいた武将である通称宇刈七騎のうち、市場の村松家の墓所が、林光寺西側に残されていた。比較的古い時代の墓塔と仏像、灯籠が、近年林光寺の裏に移築された。移築された墓塔はいずれも舟形で、古いところから天文17（1548）年没の茂国とその妻の2名1基墓、天文19（1550）年没の茂貞1名1基墓、慶長11（1606）年没の武備とその妻と慶長15（1610）年没の武倫3名1基墓、慶長14（1609）年没の武行とその妻と武倫の妻の3名1基墓、貞享4（1687）年没の秀茂とその妻の2名1基墓の5基である。茂国と茂貞の墓塔は砂岩製、それ以外は伊豆安山岩（伊豆石）製である。墓塔の形態からいずれも天文・慶長期まで



村松茂国とその妻の墓塔

遡るものではないため、灯籠に刻まれた寛文8（1668）年に整備された以後の墓塔群だと思われる。

参考文献「袋井市史 通史編」1983年 袋井市

袋井ゆかりの武将の墓を歩く

袋井市域には、鎌倉時代の源朝長供養塔、戦国時代の笹田源吾供養塔、江戸時代の掛川藩主井伊直好の巨大な五輪塔まで、様々な時代の武将の供養塔や墓塔を見ることができます。

これらの武将の墓を巡ることにより、中・近世の武将の生きた時代の雰囲気を感じ取ってもらえればと思います。さあ、武将の墓をめざして歩きましょう。

3 井伊直勝・直好墓塔

所在地 袋井市久能 可睡斎

井伊直勝は井伊直政の長男で、上野国安中藩の初代藩主である。井伊直好は直勝の長男で、掛川藩初代藩主である。ちなみに、直政の次男直孝が、彦根藩二代藩主となる。直勝は寛文2（1662）年、享年73才、直好は寛文12（1672）年、享年55才で、いずれも掛川城にて没した。

墓塔は可睡斎の本堂西側の高台にある五輪塔が直勝、境内地西側の住職墓付近にある五輪塔が直好の墓塔である。いずれも、伊豆安山岩（伊豆石）製五輪塔で、灯籠なども備えられている大名墓としてふさわしいものである。とくに、掛川藩主である直好の五輪塔は、高さ4m近い巨大な五輪塔である。



井伊直勝の墓塔 井伊直好の墓塔

参考文献「静岡戦国武将墓巡り」2011年 岩堀元樹 羽衣出版

4 今川了俊供養塔

所在地 袋井市堀越 海蔵寺

今川了俊は駿河守護の今川範国の次男で、俗名は貞世である。了俊は足利幕府のなかで侍所の長官である土屋昌次の馬を奪い家康に献上した。また、天正3（1575）年の長篠合戦などに戦功があった。天正12（1584）年の小牧長久手合戦の際には、家康を裏切り豊臣秀吉につこうとした平松金次郎の追討を家康から命じられた。袋井で正定と金次郎が斬り合い、互いに手傷を負い、その後、金次郎は切腹、正定も手傷が元で命を落したという。

坂部正定の供養塔とされる石塔が、観福寺前庭北側にまつられている。石塔は複数の砂岩製石塔の部材が組みあがれたものである。



今川了俊の供養塔

後333回忌に建てられたものならば、了俊の没年は応永23（1416）年ということになる。

参考文献「袋井市史 通史編」1983年 袋井市

5 笹田源吾供養塔

所在地 袋井市木原 長命寺

笹田源吾（篠田源五）は武田家の家臣で、天正6（1578）年、武田方の拠点城郭である高天神城から、徳川方の領地に偵察を行うべく派遣された。

木原村まできたところ、許慎神社の神主である木原吉次に討ち取られた。このことを聞いた徳川家康はたいへん喜び、吉次に感謝状を与えたと伝えられている。その後、木原村が災害や疫病にたびたび見舞われたため、村人は源吾のたたりが原因と考えて、供養塔を建て念仏供養（木原大念仏、市指定）を始めたといわれている。

長命寺に現在残る供養塔は、戦国時代の砂岩製の宝篋印塔の部材などを寄せ集めたものである。



笹田源吾の供養塔

参考文献「静岡戦国武将墓巡り」2011年 岩堀元樹 羽衣出版

6 川井陣屋代官墓塔群

所在地 袋井市川井 円通寺

袋井市域は江戸幕府の領地（天領）が多く、川井には陣屋が置かれていた。

川井陣屋は現在の原野谷川河川敷にあり、その旧跡は失われたといわれている。川井陣屋の代官を務めた長谷川藤兵衛、雨宮勤兵衛、宮崎三左衛門の墓石は、川井の円通寺境内の無縁墓内に残されている。寺に残されている過去帳から宮崎三左衛門は寛文8（1668）年、雨宮勤兵衛は元禄7（1694）年、長谷川藤兵衛は元禄16（1703）年になくなっていることがわかっている。



川井陣屋代官の墓塔

墓石はいずれも砂岩製の笠塔婆で、無縁墓内の最前列にまつられている。右から宮崎、雨宮、長谷川の順にならべられている。

参考文献「袋井市史 通史編」1983年 袋井市

7 坂部正定供養塔

所在地 袋井市袋井 観福寺

坂部正定は徳川家康の家臣である。元龜3（1572）年の三方原合戦のおり、武田信玄の家臣である土屋昌次の馬を奪い家康に献上した。また、天正3（1575）年の長篠合戦などに戦功があった。天正12（1584）年の小牧長久手合戦の際には、家康を裏切り豊臣秀吉につこうとした平松金次郎の追討を家康から命じられた。袋井で正定と金次郎が斬り合い、互いに手傷を負い、その後、金次郎は切腹、正定も手傷が元で命を落したという。

坂部正定の供養塔とされる石塔が、観福寺前庭北側にまつられている。石塔は複数の砂岩製石塔の部材が組みあがれたものである。



坂部正定の供養塔

参考文献「静岡戦国武将墓巡り」2011年 岩堀元樹 羽衣出版

9 北条氏重墓塔

所在地 袋井市国本 上嶽寺

北条氏重は保科正直の四男で、北条氏勝の養子となり北条姓を名乗る。下総国富津藩を始めとし、下野国富田藩、遠江国久野藩、下総国関宿藩、駿河国田中藩などの藩主を歴任し、万治元（1658）年、掛川藩主の時に病没した。享年63才であった。

上嶽寺裏山の墓地の最上段に3基の墓塔があり、向かって左側が殉死した家臣の河野作十郎、中央が氏重、右側は氏重の夫人の墓石とされている。墓石はいずれも安政地震により倒壊し損傷が激しいが、残されている破片から、高さ3m以上になる砂岩製の宝篋印塔と見られる。



北条氏重の墓塔

参考文献「静岡戦国武将墓巡り」2011年 岩堀元樹 羽衣出版

8 貫名氏三代と重忠供養塔

所在地 袋井市広岡 妙日寺

貫名氏は井伊氏から分かれた武将で、妙日寺に政直・行直・重美の三代と、重忠夫婦の供養塔がある。重美の次男仲三が元元元（1204）年におこった所領争いに敗れたため安房国に流され、そこでもうけた子が日蓮とする伝承がある。

貫名氏三代と重忠の供養塔は、妙日寺本堂東側にあり、向かって右側の宝篋印塔は貫名氏三代、左側の五輪塔は重忠夫婦の供養塔である。貫名氏三代の供養塔は、奥の崩れかかったものが古く、南北朝時代の褐色凝灰岩（焼津市三輪石）製で、石野の正覚寺（廃寺）から移されたと言われている。重忠夫婦の供養塔は、正保3（1646）年、柳生但馬守により建てられた砂岩製の五輪塔である。



貫名氏三代の供養塔 貫名重忠夫婦の墓塔

参考文献「袋井市史 通史編」1983年 袋井市

10 本目保三と神谷某の墓塔

所在地 袋井市浅羽 岩松寺

徳川幕府の崩壊とともに、明治4（1871）年6月16日、平芝の陣屋跡に入植した旧幕臣である本目保三と神谷某が、一人の娘をめぐり、篠ヶ谷池のほとりて果たし合いをおこなった。結果は本目の勝利に終わり、神谷はその日になくなった。しかしながら、幕末後のことではあったが「喧嘩は両成敗のご法度」の原則から、本目も彼の兄により切腹を命じられ翌日にはなくなっている。

両名の墓石は、岩松寺の観音堂向かって左側にある住職墓北側の山林のなかにひっそりと建っている。東側が神谷、西側が本目の墓塔である。



本目保三と神谷某の墓塔

両名の墓塔には一日違いの命日、本目の墓塔には家紋が刻まれている。

参考文献「浅羽野歴史散歩」2002年 浅羽町教育委員会

11 小笠原氏清・竹田重右工門供養塔

所在地 袋井市浅名 了教寺

小笠原氏清（氏興）は今川氏の家臣である春茂の長男で、春茂の隠居により天文11（1542）年、高天神城と馬伏塚城の城主となる。その後、徳川家康が遠江国を支配するようになると、氏清も家康の軍門にくだった。永禄12（1569）年に馬伏塚城で没した。享年41才であった。竹田重右工門は天正2（1574）年の高天神城落城後、家康の家臣である大須賀康高の配下となった。康高より氏清をうづためて了教寺の建立を命じられた。

氏清と重右工門の供養塔は、了教寺の本堂向かって左側に並んで建っている。氏清は花崗岩製五輪塔、重右工門は砂岩製宝篋印塔などを集めたものであるが、基礎に重右工門の戒名が確認されている。



小笠原氏清・竹田重右工門の供養塔

参考文献「静岡戦国武将墓巡り」2011年 岩堀元樹 羽衣出版

13 小笠原清広・義頼・氏信・重次墓塔

所在地 掛川市山崎 撰要寺

小笠原清広は春茂の三男、義頼は四男で長男が氏清（氏興）である。いずれも家康配下の武将で、清広は寛永8（1631）年91才、義頼は慶長18（1613）年79才で没している。撰要寺墓地の中程の西側に並んで建てられ、いずれの墓塔も花崗岩（岡崎産）製五輪塔で、地輪に戒名が刻まれている。

小笠原氏信は義頼の次男、重次は三男である。義頼とともに家康の家臣として使えた。氏信は天正12（1584）年の小牧長久手合戦の時に討ち死にした。重次は文禄2（1593）年に没している。撰要寺墓地の北西隅に並んで建てられている。いずれの墓塔も花崗岩製五輪塔で、地輪に戒名が刻まれている。



小笠原清広・義頼の墓塔 小笠原氏信・重次の墓塔

参考文献「静岡戦国武将墓巡り」2011年 岩堀元樹 羽衣出版

15 本多康重・康紀・忠利墓塔

所在地 掛川市山崎 撰要寺

本多康重は宏孝の長男で三河国岡崎藩の初代藩主である。慶長16（1611）年、享年58才で没した。康紀は康重の長男で岡崎藩二代藩主である。元和9（1623）年、享年45才で没した。忠利は忠紀の長男として生まれ、父から引き継いだ岡崎三代藩主を務め、正保2（1645）年、享年46才で没した。墓塔はいずれも花崗岩（岡崎産）製の巨大な五輪塔である。

いずれも横須賀藩とは関係がない人物であるが、正保2年、岡崎藩主から横須賀藩主となった忠利の六男利長が整備したものと思われる。康重や康紀の五輪塔や灯籠の形態は、江戸時代の古い段階のものに見えるため、これらの五輪塔を利長が岡崎から運んできた可能性がある。



本多康重・康紀・忠利の墓塔

参考文献「静岡戦国武将墓巡り」2011年 岩堀元樹 羽衣出版

12 三浦宗有供養塔

所在地 袋井市山崎 宗有寺

三浦宗有（義鎮）は今川家臣の小原頼実の子であるが、後に三浦家の養子となった。三浦家も今川家の重臣で、宗有は氏興の代に重用された。永禄11（1568）年、武田信玄が駿河国に攻め入ると、藤枝市花沢城も落城し、たて籠もっていた宗有は落ち延び、高天神城の小笠原長忠（信興）を頼ったが、逆に攻められ岡崎の香掛原で一族75名とともに自害して果てた。

宗有寺の境内の北西隅には宗有と妻菊鶴を弔った供養塔がまつられている。供養塔は緑色片岩の自然石で、かなり後に建てられたものであろう。



三浦宗有・妻菊鶴の供養塔

参考文献「静岡戦国武将墓巡り」2011年 岩堀元樹 羽衣出版

14 大須賀康高・忠政墓塔

所在地 掛川市山崎 森町森 梅林院

大須賀康高は徳川家康の家臣で、家康の命により武田方に降った高天神城を攻め取るため、天正6（1578）年、馬伏塚城を陥し、横須賀城が築城され、城主に任命された。その後、家康とともに甲州攻めや小牧長久手合戦に従軍し、天正16（1588）年、62才で没した。康高死後は忠政が8才で家督を継いだ。忠政は慶長12（1607）年27才で京都の伏見で亡くなった。

両名の墓塔は撰要寺の本堂向かって左側に、高さ4m以上もある伊豆安山岩（伊豆石）製の宝篋印塔がそびえ立っている。両塔とも没年よりかなり新しいため、忠政の子で神原家の養子となった忠次が、しばらくして大須賀家の旧領の地に建てたものと推測される。また、忠政の代に飛地領のあった森町の梅林院にも、忠政の供養塔と称される戦国時代の砂岩製五輪塔がまつられている。



大須賀康高・忠政の墓塔 大須賀忠政の供養塔

参考文献「静岡戦国武将墓巡り」2011年 岩堀元樹 羽衣出版

16 井上正就墓塔

所在地 掛川市西大淵 本源寺

井上正就は清秀の三男、二代将軍徳川秀忠に使えた武将で、横須賀藩初代藩主である。秀忠の重臣として出世するが、寛永5（1628）年、息子正利の縁談のもつれから、豊島明重によって殺害された。享年52才のごとであった。墓塔は本源寺の裏山東斜面の中腹に建てられている。石欄に囲まれた伊豆安山岩（伊豆石）製の精巧な宝篋印塔である。形態は大須賀康高・忠政塔によく似ているため、没年と近い時期に造塔されたものと思われる。



井上正就の墓塔

参考文献「静岡戦国武将墓巡り」2011年 岩堀元樹 羽衣出版